及川　甚三郎　―夢を追い続ける―

及川甚三郎は安政二（一八五五）年、鱒渕村（現在の登米市東和町米川）に農家の三男として生まれました。甚三郎は、子どものころから、何でも自分でやってみないと気のすまないところがありました。

六歳のときには、一度見たら将来大金持ちになるといわれる「金の馬」に会いたい一心で、真夜中に一人で山の中を歩き回ったことがありました。また、十歳のときには、海の水が本当に塩辛いのかを確かめるために、二日がかりで志津川の海まで一人で出かけたこともありました。甚三郎は二十一歳で及川家の婿養子になり、家業の川運送業の仕事を始めました。二年後には北上川を利用し、約四十キロメートルはなれた石巻港まで大量の炭を運ぶ仕事を任されるようになっていました。

及川甚三郎（東和町源氏ボタル交流館蔵）

ある夏の暑い日に、甚三郎は立ち寄った飯屋で、氷を食べている船員の姿を目にしました。そのころの甚三郎には、夏に氷があるということは信じられないことでした。ところが、東京や大阪では冬に保存していた氷を夏に食べることが流行しており、その日も北海道から東京へ運ぶ途中の氷を、船員が飯屋に持ちこんだということを聞き出しました。甚三郎はじっとその氷を見つめていました。

川運送業…川や運河などで、運賃などをもらって人や物を運ぶ仕事。

飯屋…ご飯などの飲食物を出す店。食堂。飲食店。

ほかの人なら驚きはしても、自分でやってみようと思う人はほとんどいないのですが、甚三郎は思い立ったら、それを納得するまでやってみないと気がすまない性格でした。さっそく鱒渕の氷を利用して製氷会社を作り、二十六歳のときには仙台でも名を知られるくらい、大きな会社にしました。

三十一歳のころには、長野県で機械製糸工場が作られ、製糸業が発展していることを聞きました。すぐに、鱒渕でもできるのではないかと考えいろいろ調べてみました。その結果、蚕を育てるために桑を生産できること、近くにきれいな水が流れていること、ボイラーの燃料となる薪が豊富にあることなど、製糸工場をつくるための条件が鱒渕でも整っていることがわかりました。さっそく長野県へ出かけ機械を買い入れ、技術者を連れて来ることを決めました。一年後には宮城県内で初めての製糸工場を設立しました。さらに、甚三郎は会社を大きくするため、桑の苗を農家に無償で配布し、まゆの生産量を増やす工夫なども行いました。甚三郎は仙台や石巻にも関連会社を設立し、大きな利益をあげるようになりました。

甚三郎は、「新しがり屋の及甚」、「製糸工場の及甚」、「氷屋の及甚」、「川運送の及甚」などと呼ばれ、実業家として成功するとともに、地域の産業を発展させることにも貢献していました。

甚三郎が四十二歳のとき、知り合いの佐藤惣右衛門からこんな話を耳にしました。

「カナダのフレーザー川では、たくさんのサケがとれるが、卵はすべて捨ててしまうそうだ。」

その話を聞くと、

「えっ、ほんとうか。」

と、甚三郎は目を大きく見開きました。そして、そのまま一点を見つめ、じっと考えこんでしまいました。甚三郎はチャンスがあれば、カナダでサケ漁をやってみようという気持ちを大きくしました。自分の思いを押さえきれなくなり、家族や周囲の反対を押し切り、氷屋や製糸工場の事業をすべて親せきに任せ、たった一

実業家…会社などをつくり、経営する人。

人で海を越え、カナダのフレーザー川に行くことにしました。

船に乗り、二十日間かけてバンクーバーに着きました。しかし、約束していた佐藤惣右衛門には会えませんでした。けれども、船の中で知り合った牧師の助けで、通訳を見つけてもらい、通訳とともにフレーザー川の近くの町にたどり着くことができました。甚三郎はすぐに、缶詰工場に足を運びました。間違いなくサケの卵が捨てられていることを確かめた甚三郎は、目の前に大きなチャンスが広がっていることを確信しました。

甚三郎は、いつものように入念に調べました。どうしたらサケをとる許可が得られるのか、工場を作るためにはどうしたらよいのかなど、日本で会社を作るよりも難しいことばかりでした。しかし、持ち前のチャレンジ精神に灯がついたように、甚三郎は熱心に調べました。甚三郎はサケ漁の経験はありませんでしたが、バンクーバー近くの漁師町で、サケ漁などをしながら、約一年間は現地の様子やサケ漁について勉強をしました。そして、数せきの船と少しの土地を借り、丸木小屋を建て日本人移民の仲間五人と、サケ漁を始めることができるようになりました。

甚三郎が四十七歳のころには、日本からの移民も多くなり、フレーザー川の中にあるドン島とライオン島を借りるまでになりました。甚三郎を中心とする日本人移民の仕事ぶりが現地の人々にも認められるようになりました。仕事が軌道に乗り出すと、甚三郎は塩ザケやサケの卵を日本へ輸出し、さらには醤油や味噌、酒づくりまで行うようになりました。ドン島は及川島と呼ばれるようになり、ライオン島はいっしょに事業を始めた仲間の名前から佐藤島と呼ばれるようになっていました。

日本からきた人たちが、汗を流しながらも生き生きと働いている姿を見て、甚三郎は、あのときの自分の選択をしみじみと考えていました。

カナダに渡ってから十年が過ぎたころ、甚三郎のふるさとの村が、赤痢の流行や二年続きの不作、日露戦争の影響などにより、食べるものもなく働いても働いても生活は苦しいものになっていたことを知りました。甚

入念…ていねいにくわしく。

日露戦争…一九〇四年に、日本とロシアが行った戦争。

三郎は、村人を救いたいという気持ちで、カナダで働こうと熱心に誘いました。甚三郎は水安丸という中古の船を自費で用意し、カナダに行く手伝いをしました。数々の困難がありましたが、人々は熱心に働き、かせいだお金をふるさとに送金できるようになりました。その後も登米地方から多くの人がカナダに渡っていくようになり、日本人のカナダ移住の道を開くきっかけとなりました。

現在でも、甚三郎の夢を追い続けた精神はカナダで語りつがれ、水安丸で渡った人々と関係の深い人々がカナダ全土に住んでいます。特に、B・C州バーノン市は、登米市の友好姉妹都市として交流を深めています。

水安丸記念碑（東和町華足寺）

及川 甚三郎

及川 甚三郎は、安政二（一八五五）年、鱒渕村（現在の登米市）に生まれた。四十二歳のときにカナダに渡った後、故郷の人々の生活の苦しさを知り、多くの人々をカナダへ移住させたことで、故郷の村を貧しさから救った。甚三郎がカナダ移住の道を開いたおかげで、カナダのバーノン市と登米市は友好姉妹都市として現在も交流を深めている。

B・C州…ブリティッシュ・コロンビア州のこと。

友好姉妹都市…文化交流などを目的とした結びついた都市と都市。